



「差別」について、みんなで考えましょう！

校長 田中 成志

■京都市で難病の筋萎縮性側索硬化症(ALS)の女性患者(当時51歳)に頼まれ薬物を投与し、殺害したとして医師2人が逮捕されるという事件が起きました。朝日新聞は、この事件についての読者の声を募集したところ、本校保護者である平野隆洋さんの投稿記事が掲載されました。ご紹介します。

「安楽死という希望は(中略)社会が作り出した差別の中で生み出された彼女の叫び」。筋萎縮性側索硬化症(ALS)をめぐる今回の事件で、心にモヤモヤが残る時、ある患者さんの言葉を紙面で読み、心が震えた。

疾病やけが、障害などで、想像できない苦しみや悲しみと共に生き、介護を必要する人たちは大勢いる。その人たちが差別に苦しまず、「死」を選択肢としないで生活できる社会を当たり前にする。きれいごとではなく、そうならなければいけないと強く感じる。誰でもその立場になりうるのだから。

差別を作り出さない社会にするにはどうすればよいだろう。社会は人が作り、人は周りの環境と教育が作る。そうであれば、私に今できることは、病気や障害、差別などについて対岸の出来事とせず、知る努力をし、家族や周りと語り合うことだろう。今回の事件を機に、そうした議論をするべきではないだろうか。(朝日新聞 9月9日朝刊 「声」)

■平野さんは、この事件を「逮捕された医師の行為」ではなく、「自殺願望を持たずにはられない社会の在り方」という視点で述べられています。平野さんの「差別を作り出さない社会にするにはどうすればよいだろう」という問いかけに対して、子どもたちの幸せを実現するためにある学校は、はっきりとした答えを述べなければならぬと思いました。私が考える「差別のない社会の実現」の条件は、次の2つの考え方が社会の基盤にあることだと思っています。

■ひとつは「多様性を認める」ということです。

例え話です…。ある学級で「週に2日、業間休みにみんなで遊ぼう」と決まったとします。決まった日はクラス全員が校庭に出て、鬼ごっこやドッチボールで遊びます。遊んでいるうちに学級はどんどんまとまってきました。しかし、そのうち「造反者」が出てきます。みんなで遊ぶのはしんどいという子です。みんながうれしそうに校庭に飛び出していく様子を尻目に、教室でひとり読書に勤しみます。それが続くとみんなが怒り出します。「クラスで決めたことなんだからちゃんと守れよ!」「そうだ! そうだ!」と大騒ぎ。その子はそのうち、「決まりを守らない悪いやつ」というレッテルを張られ、仲間外れになり、無視されたり、嫌味を言われたりするようになってしまいました…。

このような集団の排除行為は、人間が集団生活を始めた狩猟時代からありました。集団が生き残るためには、きまりを守らず、自分勝手に行動する「フリーライダー」に対してサンクション(制裁行為)を行うのは当然なのです。つまり「いじめ」や「差別」は、「生きていくための正当行為」として人間の脳に組み込まれているのです。特にまとまりのある集団、正義感の強い集団ほどそれは顕著に表れます。

■こんなとき大人は、鼻息荒い子どもたちに「人はいろいろなんだよ。みんなで遊ぶのが苦しい人も世の中にはいるんだよ。みんな同じではないんだよ」と話してあげる必要があります。そして「遊びの嫌いな子でも、『みんなと遊ぶのもけっこう楽しいなあ』と思えるような遊びを考えてくれないかな」と投げかける…。こんなやりとりを繰り返していると、子どもたちは「人は色々だから面白い、いろいろなメンバーがいるから集団は強くなっていく」と考えるようになり、多様な価値観で世界を見るようになってきます。それは、「白じゃなければ黒」「薬じゃなければ毒」という二分割思考ではなく、「白と黒の間には限りもなくグレーがある」という考え方です。これを認知複雑性と言います。社会全体に認知複雑性が広がると、すべての人が、自分の「居場所」を感じることができる温かい社会を構築できるはずですよ。

■大切にしなければならないもうひとつは、「他者にリスペクト精神を持つ」ということです。

以前新聞の投書で読んだ記事です。駅構内で白杖を持った目の不自由な婦人が、どちらに行ってもいいのかわからない様子で立ちすくんでいたとき、若い男性がその方の腕を何も言わずに掴んで、改札口まで連れて行きました。目の不自由な婦人は戸惑いながらも男性にお礼を言うと、その若い男性は「いいよ、いいよ」と言いながらその場を立ち去ったそうです。これは、一見「いい話」のようですが、この若い男性のとった行動は、明らかに「傲慢」です。目の不自由な婦人への敬意が感じられません。障害を持っている方、年配の方、子どもたちなど、社会的立場の弱い人たちに「上から」でしか接することができない人たちの「やさしさの押し売り」は、実は形を変えた「差別」です。

障害のある方は「不便」ですが、「不幸」であるとは限りません。そして困っているのかどうかは他人が決めることではなく、その人自身が感じることです。もしその人の役に立ちたいのなら「何かお困りですか？」「何かお手伝いすることはありますか？」という手続きを取って支援すべきです。それが本当の「リスペクト精神」です。

■「リスペクトの精神」は、子どもたちに教えるものではありません。大人が子どもに対して「リスペクト」の精神を持って接してあげればいいのです。まずは、大人が子どもに「ありがとう」と感謝を伝え、きちんとしたあいさつをすることから始めます。他者からのリスペクトを感じた子は、自然と他者をリスペクトするようになります。それとは逆に、子どもになめられちゃいけないと思って、「お前、何回言ったらわかるんだ！いい加減にしろよ、こら」なんて口汚く、大声で怒鳴ったりする人もいますが、そんなことを続けたら、「他者を軽く扱ってもいい、バカにしてもいい」ということを子どもたちに教えることになってしまいます。そして結果的に、そういう人は子どもたちに軽蔑されてしまいます。

■未来の社会を「差別」のない社会にするには、「多様性」と「リスペクト」という2つの考え方を、教育によって子どもたちの中に育てていくことが必須です。…しかしその前に、果たして自分自身がそれを実践しているのかを、多くの大人は自問しなければいけません。平野さんが言うように「社会は人が作り、人は周りの環境と教育が作る」としたら、今の「差別社会」を作り上げたのは間違いなく大人だからです。もしかすると、「あの子と遊んじゃだめ」「勉強しないとバカになっちゃうよ」「男の子だから泣かないの！」「みんなで決めたことは必ず守りなさい！」という、大人たちが良かれと思って子どもに発している言葉の中に差別の芽は潜んでいるのかもしれない。そのことを自覚していくことが、差別社会をなくす第一歩のような気がします。

■平野さんの投稿記事のおかげで大切なことを考えることができました。ありがとうございました。